別紙1

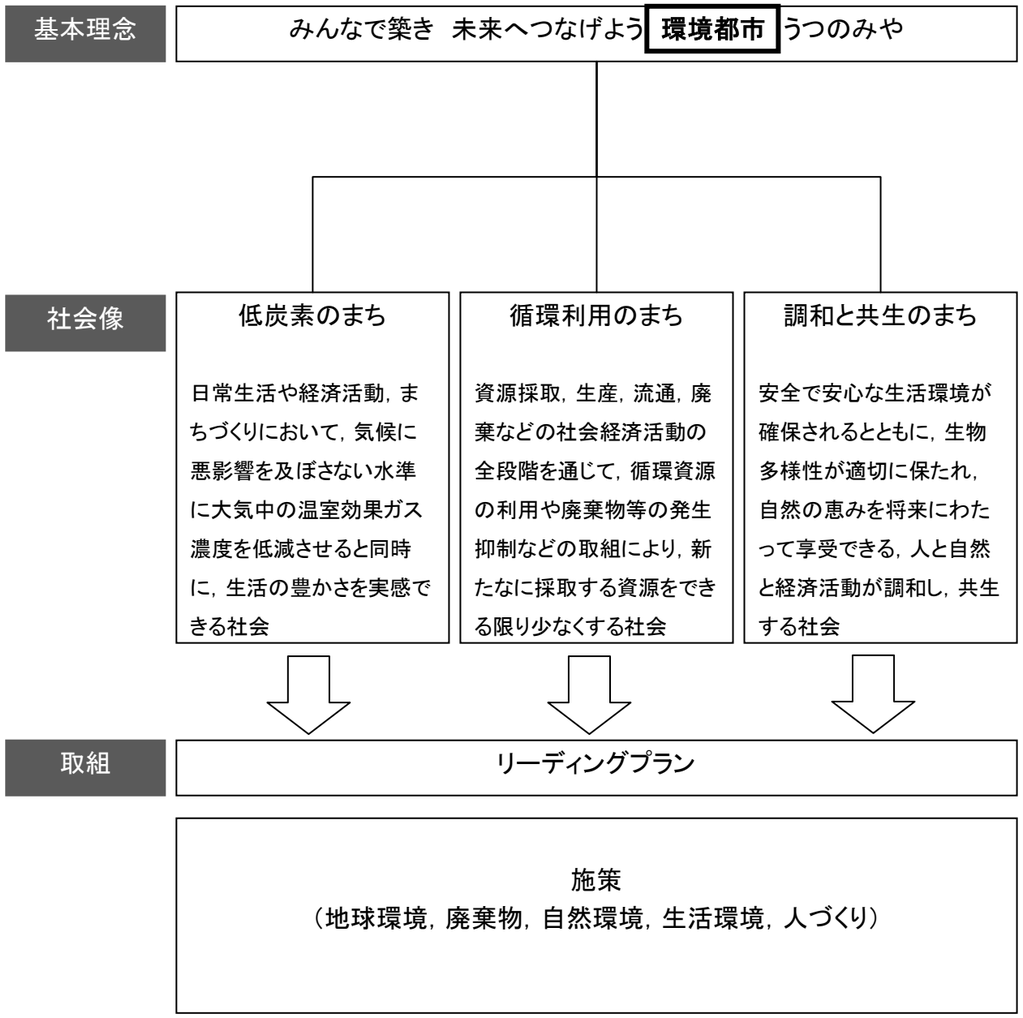
環境基本計画に位置付ける「将来の環境都市像（案）」について

1．環境都市像の基本的な考え方

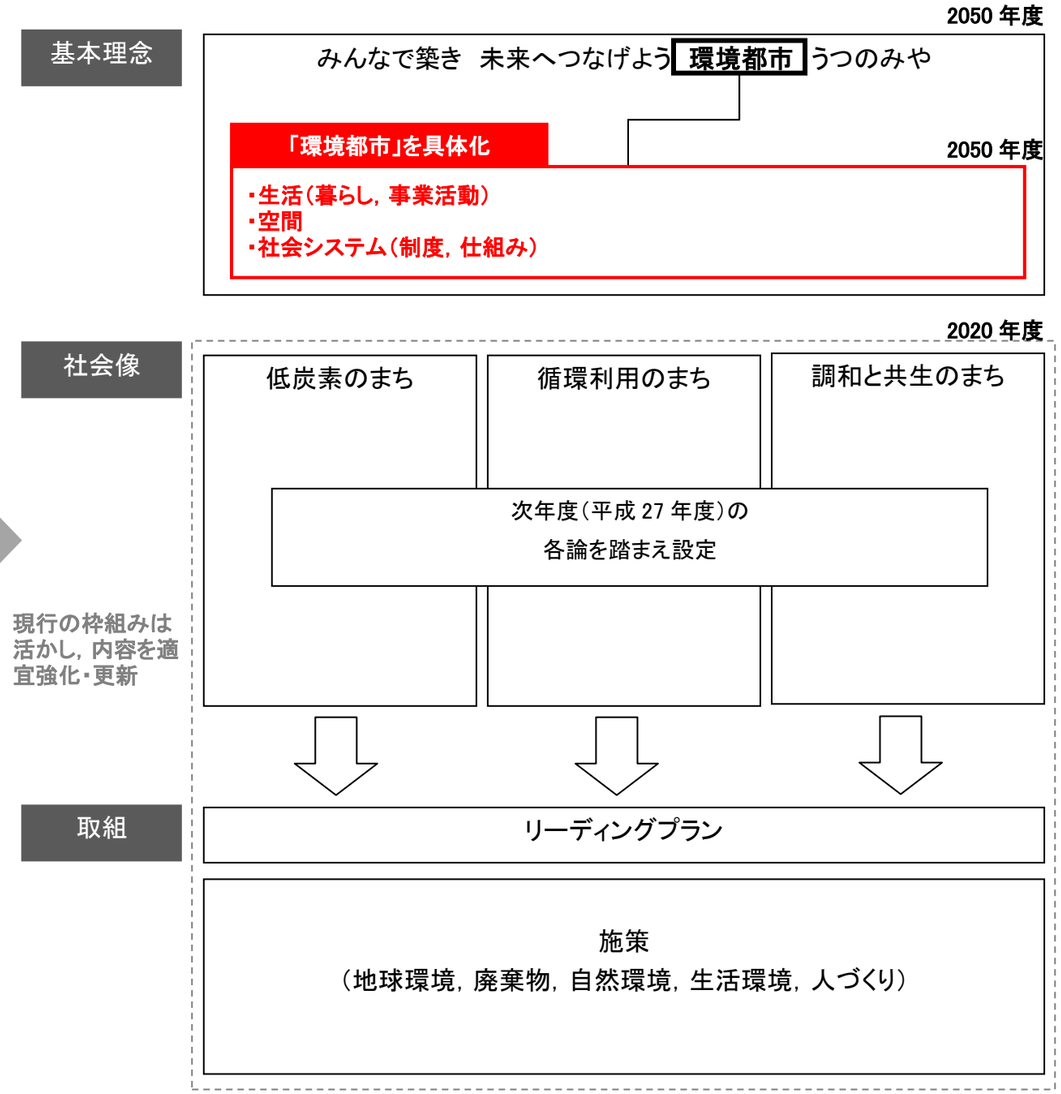
現行計画における体系は，基本理念「みんなで築き　未来へつなげよう　環境都市　うつのみや」のもと，低炭素，循環利用，調和と共生の社会像を掲げ，これらを実現するために分野別のリーディングプランや施策を設定している。

今回の計画改定にあたっては，現行計画における中間評価や国などの関連動向，市民などの意識の変化等を踏まえ，改めて市の環境に関する課題を整理・抽出した上で，当該基本理念において掲げている「環境都市」の姿を具体化し，明確な都市の姿として市民に提示していく。

現行計画（平成 23 年 3 月策定）



改定計画（平成 28 年 3 月改定予定）



２．環境都市像の検討

（１）検討方法

■ＳＴＥＰ１■

下記の２点を基本として，現行計画（第２次宇都宮市環境基本計画）に掲げる社会像ごとに，各調査結果から見えてきた課題等を整理する。

○環境行政において基本となる，「市民の健康で文化的な生活の確保に寄与する」という安全・安心な環境の実現

○国の第四次環境基本計画の「目指すべき持続可能な社会の姿」及び，現行計画における目指すべき社会像である「低炭素」，「循環利用」，「調和と共生（生活環境含む）」による社会の実現

【参考】現行計画の社会像

- 低炭素のまち　・・・・・日常生活や経済活動，まちづくりにおいて，気候に悪影響を及ぼさない水準に大気中の温室効果ガス濃度を低減させると同時に，生活の豊かさを実感できる社会
- 循環利用のまち・・・・・資源採取，生産，流通，消費，廃棄などの社会経済活動の全段階を通じて，循環資源の利用や廃棄物等の発生抑制などの取組により，新たに採取する資源をできる限り少なくする社会
- 調和と共生のまち・・・安全で安心な生活環境が確保されるとともに，生物多様性が適切に保たれ，自然の恵みを将来にわたって享受できる，人と自然と経済活動が調和し，共生する社会

■ＳＴＥＰ２■

国の第四次環境基本計画における「持続可能な社会を実現する上で重視すべき方向（今後の環境政策の展開の方向）」である下記の３つの視点をもとに，課題がクリアされた状態を導き出す。

○「持続可能な社会の基盤となる国土・自然の維持・形成」　⇒　これらを促す「空間」の視点

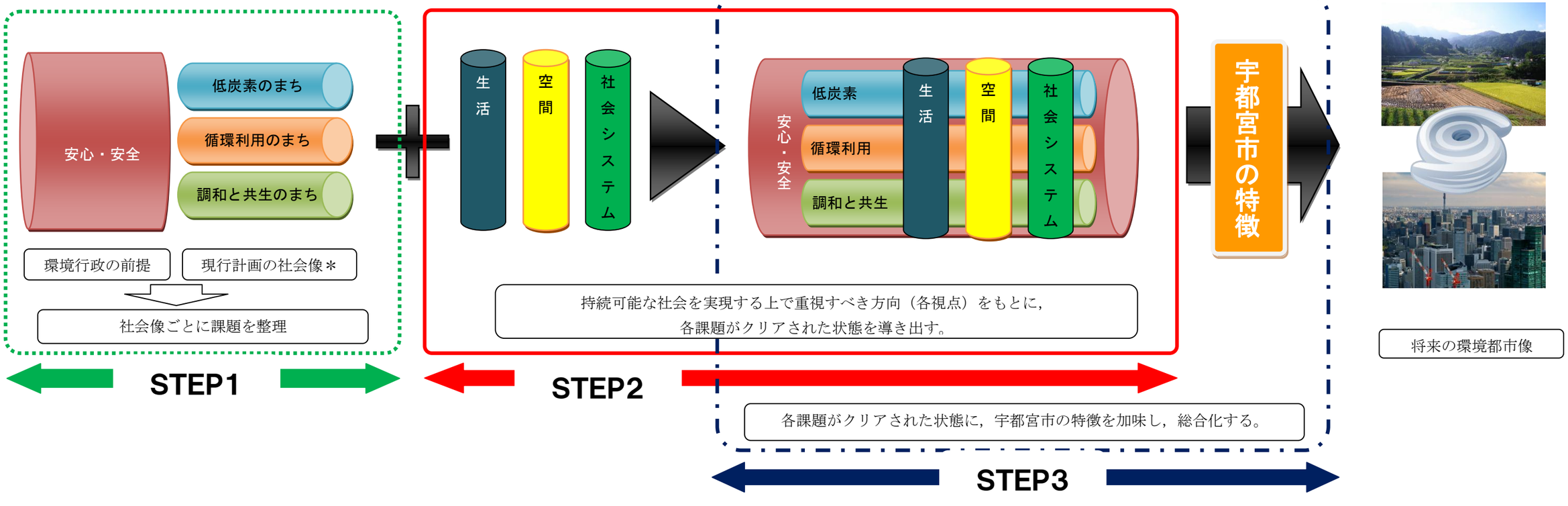
○「環境・経済・社会などの分野間の連携」　⇒　これらを促す「社会システム」（制度・スキーム）の視点

○「様々な主体による行動と参画・協働」　⇒　これらを促す「生活」（くらし・事業活動）の視点

■ＳＴＥＰ３■

課題がクリアされた状態に，宇都宮市の特徴（強み・誇り）を加味し，それらを総合化しながら「将来の環境都市像」を描く。

（２）検討フロー



ＳＴＥＰ１　現行計画（第２次宇都宮市環境基本計画）に掲げる社会像ごとの課題の整理（参考資料１を参照）

社会像	課題のまとめ
①　低炭素 （参考資料1-1頁）	・市民・事業者ともに，エネルギーに対する意識は高いものの，高齢者世帯の増加などより，今後，家庭部門におけるエネルギー使用量の増加が想定されることから，省エネルギー型のライフスタタイルへの転換や再生可能エネルギーの導入等が必要 ・依然として自動車依存度が高いことから，環境負荷の少ない公共交通や EV・FCV，小型モビリティなどを活用した移動手法の最適化など，ネットワーク型コンパクトシティの形成に合わせた環境負荷低減策の充実が必要 ・今後，地球温暖化の影響により増加が想定される異常気象や災害へのリスクに対応するとともに，都市全体のエネルギーセキュリティを確保するため，安全・安心が図られたまち・社会の構築が必要 ・次世代の環境・エネルギー関連技術の活用推進のほか，地域特性を活かした地産地消エネルギー施策の実施，新たな雇用を生み出す低炭素型地域産業の創出など，環境と経済が両立する施策の展開が必要
②　循環利用 （参考資料1-2頁）	・事業系ごみの減量化・資源化を進める中では，廃棄物そのものの削減や，資源循環へと促すサイクルの構築や環境配慮行動の推進が必要 ・循環可能な資源はなるべく地域で循環させる「地域循環圏」の形成に向けて，事業者などが取り組みやすい社会システムを事業者などと連携・協力しながら構築することが必要 ・本市独自の環境政策である「もったいない」運動に引き続き取り組み，ごみの削減やリサイクルなど市民や事業者における環境配慮行動の更なる浸透が必要
③　調和と共生 （参考資料1-3頁）	・自然の循環の力を利用しながら，自然や動植物とともに生きる「循環共生型社会」を目指して，都市と自然の調和や生態系の保全等に取り組むことが必要 ・地球温暖化による気候変動や低密度な市街地の拡大，耕作放棄地や空き家の増加などに対応するため，コンパクトシティ化に併せて，都市部と農村部の調和や適正管理，都市緑化，水と緑のネットワーク形成が必要 ・市民や事業者のニーズや地球温暖化の影響を踏まえ，快適で安全な生活を支えることができる生活環境の実現や，緑化などによる快適な都市空間の形成，緑地の保全に取り組むことが必要 ・自動車依存による大気汚染に対応するため，環境負荷の少ない公共交通ネットワークの構築や EV・FCV や小型モビリティなどを活用した移動手法の最適化など，自動車からの環境負荷の低減に取り組むことが重要
④　推進基盤 （参考資料1-4頁）	・地域の環境向上のために，学んだことを地域で生かしたり，地域ぐるみでもったいない運動に取り組んだりするなど，市民や事業者と連携した環境学習や人材の育成，環境保全活動の促進が必要 ・地域資源を活用しながら，低炭素・資源循環・自然共生だけではなく，経済の活性化や地域コミュニティの再生・強化，健康づくり，文化の継承など，環境・経済・社会が統合的に向上させていく視点が重要 ・コンパクトなまちづくりが進む中において，持続可能な循環共生型社会を目指すことができるよう，環境リスクの低減を図った安全な生活の確保を第一としながら，様々な分野を横断的に統合した大局的な環境負荷低減策の検討が必要

ＳＴＥＰ２　「持続可能な社会を実現する上で重視すべき方向」を踏まえた各課題がクリアされた状態の導出

将来にわたって安全で安心して暮らせるまち

	生活（くらし，事業活動）	空間	社会システム（制度，仕組み）
低炭素 日常生活や経済活動，まちづくりにおいて，気候に悪影響を及ぼさない水準に大気中の温室効果ガス濃度を低減させると同時に，気候変動の影響にも対応し，安全で豊かな生活を実感できる社会	○誰もが気軽にスマートに移動し，人と人との交流が活発になっている。 ○技術革新により，自立分散型エネルギー社会が実現し，環境への負荷を最小限に押さえられたことで，子どもからお年寄りまでが「がまん」のないエコで快適な暮らしや経済活動が営まれている。 ○太陽光発電や蓄電池，EV・FCV などを活用した住宅が増加し，エネルギーを自給自足した災害にも強い住宅がスタンダードとなり，安全で安心した暮らしが広がっている。 ○各種の環境負荷低減策が機能することで，気候変動による被害が最小に抑えられている。 ○歩いて暮らせるコンパクトなまちとなることにより，徒歩時間が増え，健康寿命が延び，医療費など社会保障費も抑制されている。 ○水素ステーションなど新たな環境ビジネスの成長により，雇用が創出されている。	○まちのコンパクト・拠点化と拠点間を結ぶ公共交通体系が構築され，各拠点では EV や FCV，小型モビリティなどの乗り物が最適なかたちで活用されているなど，誰もが安心して移動できるまち。 ○交通の拠点となっている地域（特に LRT の電停付近）には，パークアンドバスライドの基地が整備され，周辺に病院やスーパーの他，文化施設などが集約され，少ない移動で，多くのことができる都市環境となっている。 ○農地や自然環境と市街地の有機的な連携により自然が再生され，地域の特性を活かした再生可能エネルギーの活用が進んでいる。 ○老朽化したインフラの更新期を的確にとらえ，気候変動の緩和策（省エネ化，再エネ等）や適応策（水循環等）を織り交ぜた，災害被害を最小限に抑えられる都市空間が形成されている ○まちのコンパクト化により，道路や下水道などのインフラの維持管理費等が抑制されている。	○低炭素分野を始めとした環境投資が進み，水素ステーションなど新たな環境ビジネスが，成長分野として経済を牽引している。 ○エネルギーの地産地消や，余剰エネルギーや環境価値・ブランド等の販売などで，地域内の経済循環が活性化している。 ○公共交通との乗り継ぎで自転車で市内のどこにでも行くことができる仕組みや公共交通を利用しやすいシステムができている。 ○観光拠点では，県外などから来た観光客向けの低環境負荷型のシェア専用モビリティの導入が進んでいる。 ○新たに造成された宅地は，エネルギーを自給自足できる家で構成された低炭素街区となっている。 ○HEMSなど，ICT を活用した様々なサービスが確立され，人々の暮らしを支援するシステムが構築されている。 ○市北西地域などでは，山林を温室効果ガスの吸収源として活用する仕組みができている。
循環利用 資源採取，生産，流通，消費，廃棄などの社会経済活動の全段階を通じた資源の循環利用や廃棄物等の発生抑制などの取り組みにより，地域資源が都市や農村などの地域内・地域間において持続的に循環する社会	○地域ごとの特性・特色に応じて，ものやエネルギーの循環利用やシェアが活発化したことで，様々なものを所有しなくても便利で豊かな暮らしができるようになっている。 ○市民一人ひとりが当たり前のこととして，3R行動をはじめとする環境行動を実践し，事業者は，より環境負荷の低い製品等の生産・販売及びサービスの提供とその情報発信を行うなど，事業活動の全ての段階において環境に配慮した取組を実践している。 ○都市部と農村部の各機能やエネルギーの相互利用が図られている。 ○バイオマス等の地域資源を活用した再生可能エネルギーの導入により農村部等に雇用が創出されている。	○3R等に対する市民意識の成熟により，ポイ捨てや不法投棄等のない都市空間が維持されている。 ○コンパクトシティ化が進んだことで，都市部と農村部の役割が明確になり，各地域において新たな循環のサイクルフレームが構築されている。	○少子高齢社会の進展などの社会構造の変化に対応した，ごみ集積方法や収集，リサイクルの制度が構築され，誰もが気軽に3Rなどに参画できる社会システムが構築されている。 ○自然，物質，人材，資金等が都市部，農村部を循環する仕組みが推進されている。 ○ごみ出しルールの遵守や，地域ぐるみでまちの美化活動を実践し，ポイ捨てや不法投棄防止に取り組んでいる。 ○バイオマスなどの貴重な地域資源を活用したり，新たな経済活動が成立している。
調和と共生 安全で安心な生活環境が確保されるとともに，生物多様性が適切に保たれ，自然の恵みを将来にわたって享受できる，人と自然と経済活動が調和し，共生する社会	○生物多様性の保全と持続可能な利用を通じて，生物多様性が今以上に豊かになり，自然と人間との共生社会が実現している。 ○自然資源を活用した観光等により，国内外から多くの観光客が訪れている（エコツーリズムの進展）。 ○豊かな自然の恵みの享受により，健康的なライフスタイルが浸透し，健康で快適な暮らしを楽しむ人が増えている。 ○里山などで小鳥や昆虫が多く見られるようになったことにより，憩いの場や学びの場，子どもたちの遊び場として活用されている。 ○自然資源を活用したエコツーリズム関連ビジネスにより，雇用が創出されている。	○都市拠点や地域拠点の周辺に豊かな自然が再生している。 ○都市拠点は，コンパクト化により空き家等が整理され，水と緑が今以上に増加し，快適な空間となるとともに，様々な機能が集積することで，多くの人々が集う活気あふれたエリアになっている。 ○都心部では，ビルが立ち並ぶ中にも，公園や公開空地等を活用した，身近な水やみどり，生き物などの自然を感じられ，駅前広場などでは，植えられた街路樹により，木陰が日差しを遮って歩きやすい歩道が創出されるなど，緑により快適な都市空間が形成されている。 ○森林や農地・里山などが地域住民により適正に管理されており，安全，安心な空間と景観が広がっている。	○森林，農地，里山などが，地域住民により適正に維持，管理する仕組みができている。 ○回復した生態系を活用することで，環境への負荷ができるだけ少なくなる循環を基調とする社会システムができている ○森・里・川・湖間等の健全な水循環が図られるなどにより健全な生態系の維持・回復が図られている。 ○生態系を将来にわたって享受できる自然共生型の考え方を取り入れた経済活動等が推進されている。
推進基盤 環境学習，環境イベントなどにより，市民や事業者の環境意識がさらに醸成され，環境保全活動への参加や主体・地域間の連携が強化されている社会	○　企業や住民参加など市民協働による自然環境保全・創造活動が盛んになり，それらを通じてコミュニティが再生されている。 ＜市民協働・コミュニティ再生・人づくり＞ ○　地域固有の自然等に根ざした食材や伝統料理，季節ごとの伝統行事・伝統文化が再認識されるなど，自然の恵みや地域固有の特性を活かした地域の活性化が進んでいる。 ＜歴史・伝統・地域資源の活用＞ ○　人やモノ，まちを大切にする「もったいない」の精神が市民に根付き，環境配慮行動が当たり前の行動として定着している。 ＜もったいない＞	○環境負荷低減策が機能し，水大気環境の改善や温室効果ガスの削減が進むとともに，生態系の有する防災・減災機能が上手に活用されることで，市民が安心して生活できる環境が確保されている。　＜安全・安心＞ ○コンパクトシティ化により，都市機能が集約化されたことによって新たな空間が生まれ，緑地等への転換などによる付加価値の向上や，自然と調和した生活環境が確保されている。 ＜コンパクトシティ化＞	○様々な機会を通じて環境問題について学習することができ，市民が主体的に様々な環境活動に参加している。 ＜人づくり＞

ＳＴＥＰ３　宇都宮市の特徴（強み・誇り）を加味した総合化

■宇都宮市の特徴（強み・誇り）

■　なんでもできる“好立地型とかいなか”

都市の便利さと自然の豊かさ，商工業と農業，起業のチャンスと雇用の機会など幅広い都市の魅力と，交通の要衝として広域的な活動を可能にする立地の良さから，一人一人の価値観やライフスタイル，家族構成に応じて最適なものを選択して，充実した生活を送ることができます。

- **「住みよさ度（安心度・利便度・快適度・富裕度・住居水準充実度）」が２年連続で全国１位**（東洋経済別冊「都市データパック 2014」人口５０万人以上の２８都市中）
- **子育てにやさしいまち全国２位**（AERA　with　Baby2009 年号）
- **行政サービス水準（子育て・福祉・教育・公共料金など）全国２位**（「日経グローカル」No115（平成２１年）人口５０万以上の２６都市中）
- **プロスポーツチームが豊富**（リンク栃木ブレックス，宇都宮ブリッツェン，栃木 SC）
- **大都市と地方に仕事や暮らしの拠点をおき，その２箇所を行き来しながら充実した生活を楽しむライフスタイルを楽しめる好立地**（ダブルプレイス）
- **賃貸で人気の駅**：関東１位（不動産住宅情報サイト「スマイティ」平成 24 年）
- **農業王国うつのみや**（トマト「プレミアムセブン」，にっこりなしなど）
- **国内最大級の内陸型工業団地**
- **観光産業**（餃子，カクテル，ＪＡＺＺ，ジャパンカップサイクルロードレース，大谷石など）

■　誰もが便利で快適に活動し移動できる「ネットワーク型コンパクトシティ」

市民の日常生活に必要な都市機能を集積したコンパクトな拠点と緑豊かな自然を維持保全された拠点周辺部を形成し，拠点間を結ぶ交通ネットワークを構築することにより，すべての市民が便利で快適に都市機能を享受でき，市民生活と都市の活力を高めることができる「ネットワーク型コンパクトシティ」を推進しています。

- **都市機能を集積・集約した都市拠点と地域拠点の形成**
- **都市と自然・農村部の調和のとれたまち**
- **ＬＲＴの導入**
- **交通網の結節点**（北関東自動車・東北自動車道・東北新幹線・JR 宇都宮線など）
- **地域内交通の充実**（清原さきがけ号，板戸のぞみ号など）
- **自転車のまち**（ジャパンカップサイクルロードレース，自転車走行空間の整備など）
- **自動車道路が整備された３環状１２放射道路**
- **次世代モビリティ産業の集積都市**

■　人・モノ・まち・地球にやさしい「もったいない運動」の推進

人やモノなどを大切にする心である「もったいない」の精神が，市民の日常生活や事業活動の中で行動に結びつくよう，市民協働で啓発活動を展開するともとに，環境面を始めとする様々な分野において，全市的に「もったいない運動」を推進しています。

- **「宇都宮市もったいない運動市民会議」主体による市民協働による啓発活動の展開**
- **「もったいない全国大会」の開催地**
- **もったいないフェアの開催**
- **３Ｒ運動の推進**
- **宇都宮ブランド戦略の推進**（宇都宮プライド，「住めば愉快だ　宇都宮」，アンテナショップ「宮カフェ」，「宇都宮愉快市民」，マスコットキャラクター「ミヤリー」など）
- **生涯学習センターや環境学習センターを中心とした地域教育の推進による人材育成**

将来にわたって安全で安心して暮らせる住みやすいまち

	生活（くらし，事業活動）	空　間	社会システム（制度，仕組み）
低炭素 日常生活や経済活動，まちづくりにおいて，気候に悪影響を及ぼさない水準に大気中の温室効果ガス濃度を低減させると同時に，気候変動の影響にも対応し，安全で豊かな生活を実感できる社会	○子どもからお年寄りまで誰もが自由にエコでスマートに移動できるようになり，人と人との交流が活発になっている。 ○太陽光発電や蓄電池，HEMS，EV・FCVなどの次世代自動車を活用した住宅が増加し，エネルギーを自給自足した災害にも強い住宅がスタンダードとなり，無理なく安全で安心したエコな暮らしが広がっている。 ○水素ステーションなど新たな環境ビジネスの成長により，雇用の創出が図られている。	○拠点間を結ぶ公共交通体系が構築され，EV・FCV や小型モビリティを上手に活用した，誰もが安心して移動できる空間が整備されている。 ○拠点には病院やスーパーの他，文化施設などが集約され，徒歩や自転車でも，多くのことができる便利な空間となっている。 ○都市拠点や地域拠点の周辺部分では，自然が再生され，拠点形成によるインフラの再編に合わせ，低炭素化，防災対策が促進された都市空間が形成されている	○低炭素分野を始めとした環境投資が進み，水素ステーションなど新たな環境ビジネスが，成長分野として経済を牽引し，エネルギーの地産地消に加え，余剰エネルギーや環境価値・環境ブランド等を販売することで，地域内の経済循環が拡大・活性化している。 ○公共交通の階層化によるネットワーク化，自転車道の整備，結節点整備など公共交通の利便性が向上する仕組みが構築され，低炭素型モビリティの導入が徹底的に推進されている。 ○HEMSなど，ICT を活用した様々なサービスが確立され，人々の暮らしを支援するシステムが構築されている。
循環利用 資源採取，生産，流通，消費，廃棄などの社会経済活動の全段階を通じた資源の循環利用や廃棄物等の発生抑制などの取り組みにより，地域資源が都市や農村などの地域内・地域間において持続的に循環する社会	○地域ごとの特性・特色に応じて，ものやエネルギーの循環利用やシェアが活発化したことで，様々なものを所有しなくても便利で豊かな暮らしができるようになっている。 ○都市部と農村山部の各機能やエネルギーの相互利用により，新たな人・もののサイクルが活発化している。 ○バイオマス等の地域資源を活用した再生可能ネルギーの導入により農村部等の雇用が創出されている。	○3R等に対する市民意識の成熟により，ポイ捨てや不法投棄等のない都市空間が維持されている。 ○コンパクトシティ化が進んだことで地域の持つ特徴・資源が見直されたことで，都市部と農村部の役割が明確になり，各地域において新たな循環のサイクルフレームが構築されている。	○自然，物質，人材，資金等が都市部，農村部を循環する枠組みとして，シェアリングやリデュース（減量化）リユース（再利用）したりする仕組みが推進されている。 ○利用しやすいごみごみ集積方法や収集，リサイクルの制度が構築され，誰もが当たり前の行動として3R に参画することができる仕組みが推進されている。 ○バイオマスなどの貴重な地域資源を活用したり，新たな経済活動が成立している。
調和と共生 安全で安心な生活環境が確保されるとともに，生物多様性が適切に保たれ，自然の恵みを将来にわたって享受できる，人と自然と経済活動が調和し，共生する社会	○豊かな自然の恵みの享受により，健康的なライフスタイルが浸透し，健康で快適な暮らしを楽しむ人が増えている。 ○里山などで小鳥や昆虫が多く見られるようになったことにより，憩いの場や学びの場，子どもたちの遊び場として活用されている。 ○自然資源を活用したエコツーリズム関連ビジネスなどにより，雇用が創出されている。 ○企業や NPO，地域による自然共生型の活動が活発となり，身近にところで豊かな自然を感じることのできる暮らしが市内各所で可能となっている。	○水と緑に配慮した都市部や耕作放棄地を有効活用した農村部など，各拠点の特性に合わせ自然を上手に取り入れた快適な空間が形成されている。 ○コンパクト化の推進によって空き家が減少し景観や安全性への悪影響が解消されるほか，　森林や里山など適正に管理され，安心・安全な空間が形成されている。	○森林，農地，里山などが，地域住民により適正に維持，管理する仕組みができている。 ○回復した生態系を活用することで，環境への負荷ができるだけ少なくなる循環を基調とする社会システムができている ○生態系を将来にわたって享受できる自然共生型の考え方を取り入れた経済活動等が推進されている。
推進基盤 環境学習，環境イベントなどにより，市民や事業者の環境意識がさらに醸成され，環境保全活動への参加や主体・地域間の連携が強化されている社会	○企業や NPO，住民参加など市民協働による自然環境保全・創造活動が盛んになり，それらを通じて市民主体のコミュニティが再生されている。 ○地域固有の自然等に根ざした食材や伝統料理，季節ごとの伝統行事・伝統文化が再認識されるなど，自然の恵みや地域固有の特性を活かした地域の活性化が進んでいる。 ○人やモノ，まちを大切にする「もったいない」の精神が市民に根付き，環境配慮行動が当たり前の行動として定着している。	○環境負荷低減策が機能し，水大気環境の改善や温室効果ガスの削減が進むとともに，生態系の有する防災・減災機能が上手に活用されることで，市民が安心して生活できる環境が確保されている。 ○コンパクトシティ化により，都市機能が集約化されたことによって新たな空間が生まれ，その空間で自然が再生されている。	○様々な機会を通じて環境問題について学習することができ，市民が主体的に様々な環境活動に参加している。

宇都宮市の特徴

- なんでもできる“好立地型とかいなか”
- ネットワーク型コンパクトシティによるまちづくり
- もったいない運動

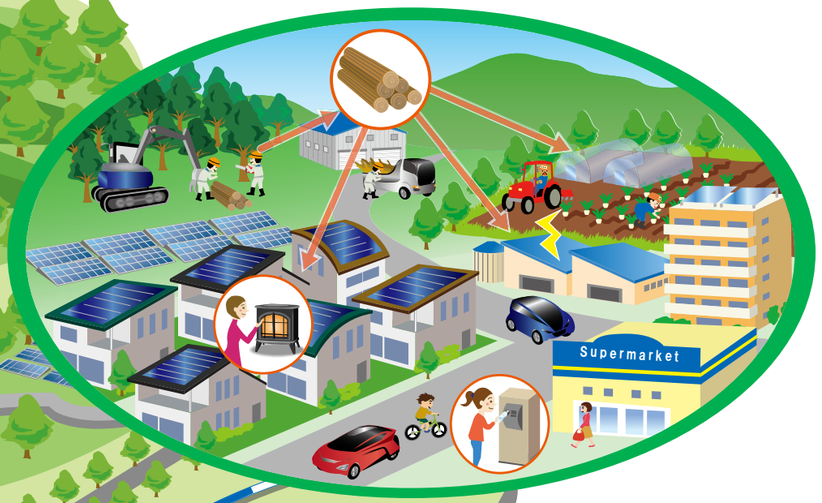
本市が目指す　環境都市の姿

もったいないの心で環境への負荷を抑えながら，うるおいのある地域の中で，心豊かに健康で充実した暮らしを享受できるまち

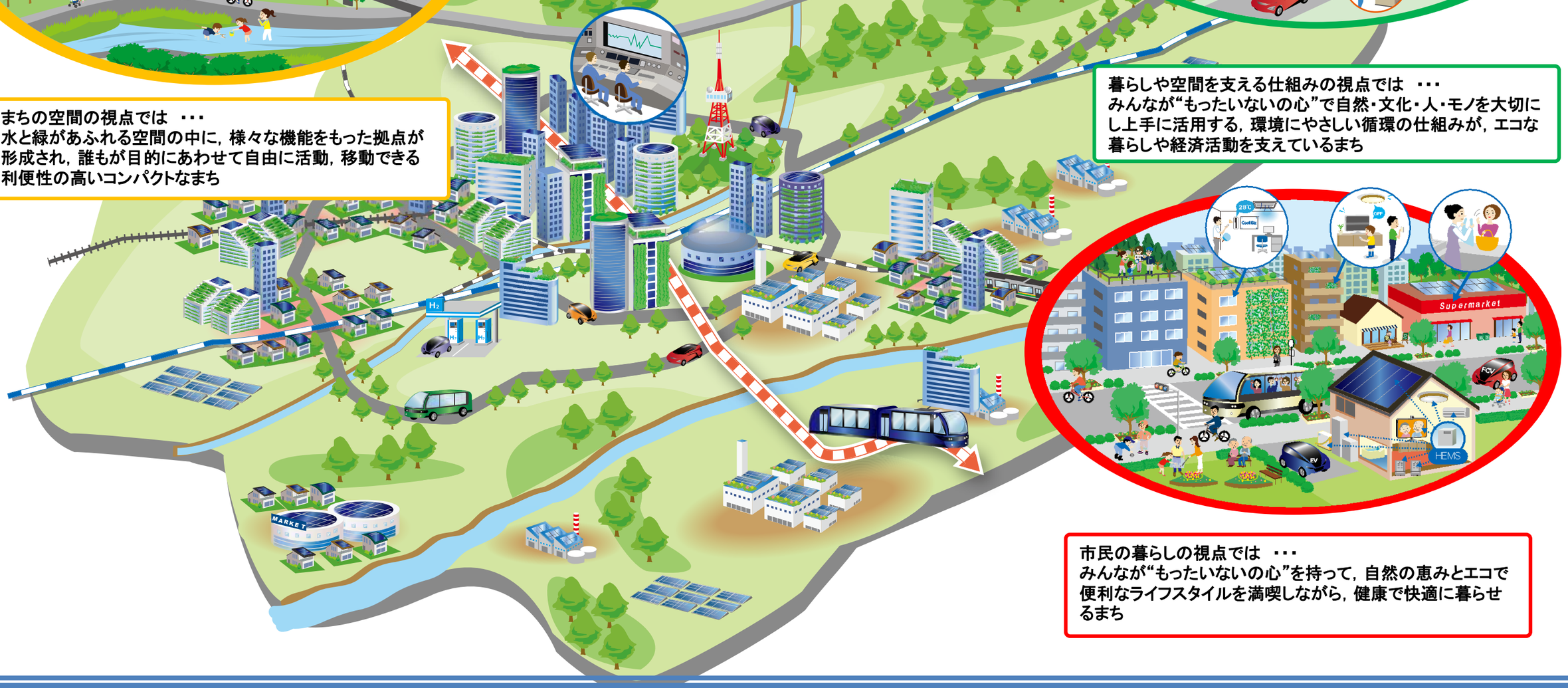
- 市民の暮らしの視点では　・・・・・・・・・・・・・・・・　みんなが“もったいないの心”を持って，自然の恵みとエコで便利なライフスタイルを満喫しながら，健康で快適に暮らせるまち
- まちの空間の視点では　・・・・・・・・・・・・・・・・・　水と緑があふれる空間の中に，様々な機能をもった拠点が形成され，誰もが目的にあわせて自由に活動，移動できる利便性の高いコンパクトなまち
- 暮らしや空間を支える仕組みの視点では　・・・　みんなが“もったいないの心”で自然・文化・人・モノを大切にし上手に活用する，環境にやさしい循環の仕組みが，エコな暮らしや経済活動を支えているまち

【参考：環境都市像（イメージ案）】

まちの空間の視点では　・・・
水と緑があふれる空間の中に，様々な機能をもった拠点が形成され，誰もが目的にあわせて自由に活動，移動できる利便性の高いコンパクトなまち



暮らしや空間を支える仕組みの視点では　・・・
みんなが“もったいないの心”で自然・文化・人・モノを大切にし上手に活用する，環境にやさしい循環の仕組みが，エコな暮らしや経済活動を支えているまち



市民の暮らしの視点では　・・・
みんなが“もったいないの心”を持って，自然の恵みとエコで便利なライフスタイルを満喫しながら，健康で快適に暮らせるまち

本市が目指す　環境都市の姿

もったいないの心で環境への負荷を抑えながら，うるおいのある地域の中で，心豊かに健康で充実した暮らしを享受できるまち

【参考：環境都市像（イメージ案）】

環境都市像を地域特性ごとに切り出し，イメージ化したもの

（例） 都市部

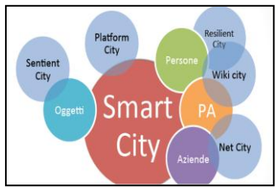
生活

○太陽光発電や蓄電池，HEMS，EV･FCV などの次世代自動車を活用した住宅が増加し，エネルギーを自給自足した災害にも強い住宅がスタンダードとなり，無理なく安全で安心したエコな暮らしが広がっている。

空間

○拠点間を結ぶ公共交通体系が構築され，EV･FCV や小型モビリティを上手に活用した，誰もが安心して移動できる空間が整備されている。

システム



○公共交通の階層化によるネットワーク化，自転車道の整備，結節点整備など公共交通の利便性が向上する仕組みが構築され，低炭素型モビリティの導入が徹底的に推進されている。

地域間では，新たな循環が創出されている。

（例） 農村部

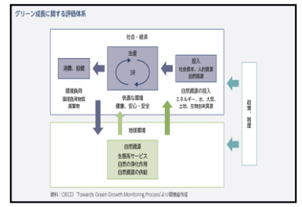
生活

○豊かな自然の恵みの享受により，健康的なライフスタイルが浸透し，健康で快適な暮らしを楽しむ人が増えている。
○里山などで小鳥や昆虫が多く見られるようになったことにより，憩いの場や学びの場，子どもたちの遊び場として活用されている。

空間

○水と緑に配慮した都市部や耕作放棄地を有効活用した農村部など，各拠点の特性に合わせ自然を上手に取り入れた快適な空間が形成されている。

システム

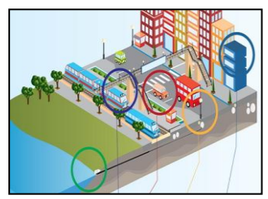


○回復した生態系を活用することで，環境への負荷ができるだけ少なくなる循環を基調とする社会システムができている
○生態系を将来にわたって享受できる自然共生型の考え方を取り入れた経済活動等が推進されている。

地域間では，新たな循環が創出されている。

（例） 地域拠点やその周辺部

生活



○子どもからお年寄りまで誰もが自由にエコでスマートに移動できるようになり，人と人との交流が活発になっている。

空間

○拠点には病院やスーパーの他，文化施設などが集約され，徒歩や自転車でも，多くのことができる便利な空間となっている。

システム

○利用しやすいごみごみ集積方法や収集，リサイクルの制度が構築され，誰もが当たり前の行動として3Rに参画することができる仕組みが推進されている。

地域間では，新たな循環が創出されている。